

## 一六八二年（天和二）の朝鮮通信使 ―小野等林筆「朝鮮通信使行列図絵巻」の紹介―

朴 美 姫\*

- はじめに
- 一・朝鮮通信使の平和外交
  - 二・小野等林筆「朝鮮通信使行列図絵巻」について
  - 三・天和二年、朝鮮通信使の日本来訪と絵画交流  
おわりに

キーワード 朝鮮通信使 小野等林 絵巻 行列図 天和度

### はじめに

一六〇七年（慶長十二）から一八一一年（文化八）まで十二回にわたり来訪していた朝鮮通信使は、政治、経済のみならず芸術文化など様々な交流をもたらした、江戸幕府に対する公式外交使節団であった。正使、副使、従事官の三使をはじめ、画員・医員・訳官など総勢約四百名から五百名にのぼる人数の朝鮮通信使一行は、漢城を出発し、釜山から対馬・福岡を経由して大坂までの海路と大坂から江戸までの陸路を船団や行列を組み半年以上の歳月をかけて移動した。

朝鮮通信使の来日は様々な方面で交流を生み、通信使一行を描いた絵巻や浮世絵などが近年様々な観点から論じられている<sup>1)</sup>。

本稿では一六八二年（天和二）の作とされる小野等林筆「朝鮮通信使行列図絵巻」（東京都江戸東京博物館所蔵、資料番号93200884）について紹介し、同年に日本へ派遣された朝鮮通信使と絵画交流について述べることにはしたい。

### 一・朝鮮通信使の平和外交

まず、本稿の中心となる朝鮮通信使について触れておくことにする。江戸時代の外国使節は、朝鮮通信使ばかりではなく、一六三四年（寛永十一）から一八五〇年（嘉永三）までの十八回におよぶ琉球使節、一六三三年（寛永十）からはじまるオランダ商館長らがあるが、その使節団の内容と規模、そのまじわりの深さにおいては、朝鮮通信使が群を抜いている。

使節は当初三回までは「回答使兼刷還使」と称したが、一六三六年（寛永十三）以後は、「通信使」と呼ばれるようになった。朝鮮通信使という連絡をする任務をもった人が往来したかのような印象があるが、ここでは「信」に重要な意味が込められている。「信」は信頼関係を深めあうという意味で、徳川將軍と朝鮮国王の間でよしみを通わすことを指した。これは江戸時代の日本側の文献には「信」という字だけを使った「朝鮮信使」という表現がよく見られることから明らかである。

朝鮮通信使は形式としては徳川幕府と朝鮮との間を往来したが、その

\*東京都江戸東京博物館学芸員

内実は徳川將軍と朝鮮国王との間の善隣友好關係を象徴する使節であった。両国の平和と友好、文化交流に果たした役割は朝鮮通信使について研究された数多くの文献から確認することができる<sup>(2)</sup>。

朝鮮通信使の来日は、徳川幕府の要請に依って開始されるが、その実現は難行した。来日した通信使が、その三回までを「回答使兼刷還使」と称したのも、一五九二年（文禄元）四月十二日から一五九八年（慶長三）にかけて行われた豊臣秀吉が主導する遠征軍と朝鮮および明の軍との間で交渉を交えながら戦われた文禄・慶長の役（壬辰・丁酉倭乱）によって捕虜、通行抑留された人びとを取り返すことが当時の朝鮮の急務だったことに由来する。したがって「回答」は日本の使節に対する返礼の使節という意味でこのような名称が付けられたと考えられる。信使あるいは通信使を名乗るようになってからも、一六五五年（第六回・明暦元）まで引き続き捕虜返還の交渉は続けられていた。また実際、その初期には「探統使」という言葉が使われていたように、朝鮮通信使には日本の実情を偵察する任務もあった。

徳川幕府にとって通信使は、朝鮮の状況を知るとともに、毎年明清の燕京（北京）へ使節（燕京使）を派遣している朝鮮王朝との通交を介して清朝の情報も入手する有効な手段であった。さらに朝鮮から大使節団を受け入れ、諸大名に財政や労役の負担を命じることによって、將軍の權威を誇示し、西国を中心とする大名の統制を強化するという幕藩体制維持のねらいもあった<sup>(3)</sup>。しかしこのような日朝關係は単なる修好のみではなく以下のような目的が付されていた。

- 第一回 一六〇七年（慶長十二年）「朝鮮」宣祖四十年  
日朝国交回復、捕虜返還
- 第二回 一六一七年（元和三年）「朝鮮」光海君九年  
徳川家康による大坂平定

第三回 一六二四年（寛永元年）「朝鮮」仁祖二年  
家光の將軍繼承祝賀

第四回 一六三六年（寛永十三年）「朝鮮」仁祖十四年  
泰平の架

第五回 一六四三年（寛永二十年）「朝鮮」仁祖二十二年  
家網誕生の慶祝及び日光東照宮落成祝賀

第六回 一六五五年（明暦元年）「朝鮮」孝宗六年  
家網襲封祝賀

第七回 一六八二年（天和二年）「朝鮮」肅宗八年  
綱吉襲封祝賀

第八回 一七一一年（正徳元年）「朝鮮」肅宗三十七年  
家宣襲封祝賀

第九回 一七一九年（享保四年）「朝鮮」肅宗四十五年  
吉宗襲封祝賀

第十回 一七四八年（寛延元年）「朝鮮」英祖二十四年  
家重襲封祝賀

第十一回 一七六四年（明和元年）「朝鮮」英祖四〇年  
家治襲封祝賀

第十二回 一八一一年（文化八年）「朝鮮」純祖十一年  
家齊襲封祝賀（対馬に差し止め）<sup>(4)</sup>

第六回の家網將軍襲封の祝賀以降は、將軍繼承をことごとくことが主な名目となった。その外交には、対馬を仲立ちとした鎖国制下の日本が国家間の正式な外交關係を結んだ朝鮮貿易<sup>(5)</sup>の利益や文化交流の促進のほか、さまざまな要素が内包されている。

徳川幕府と朝鮮王朝との間で繰り広げられた二百有余年にわたる日朝外交は、その史脈にいくつかの特色があり、これを三期あるいは四期、

六期に区分する見解が提出されている<sup>(6)</sup>。徳川幕府と朝鮮王朝との関係も、時期による変化があり、日本と朝鮮それぞれの国情にも推移があった。第三回(一六二四年)までを国交再開期、第八回(一七一一年)までを新たな通交関係の確立期、第十一回(一七六四年)までを恒例遵守の安定期、そして最後の第十二回(一八一一年)以降を衰退期とみなす説が一般的である。第十二回(対馬どまり)で朝鮮通信使の来日は終わるが、日朝間の外交は、対馬藩と対馬へ来島した朝鮮訳官使を中心に幕末まで代行された。

## 二・小野等林筆「朝鮮通信使行列図絵巻」について

通信使を描いた絵画が数多く存在する中、天和度の朝鮮通信使を描いた行列図として絵師が明らかになっている図巻は狩野永敬筆「朝鮮通信使行列図巻」(ニューヨーク市立博物館スパンサー・コレクション)と本稿で紹介する「朝鮮通信使行列図絵巻」(東京都江戸東京博物館)のみである。「朝鮮通信使行列図絵巻」は、島津家に伝えられていたもので、当館には一九九三年に収蔵され、二年後の一九九五年に修復が行われた。資料の寸法は縦二十八センチメートル、横四七三・七センチメートルで、落款と印章はあるが同所に複数押されているため、詳細は確認できない。筆者の小野等林については『増補浮世絵類考』、『扶桑画人伝』に長谷川等伯の門人や養子であるという記載はあるものの、本図巻の制作年代から考えると年代にずれが認められることから絵師等林の詳細については今後の課題としておきたい。

題箋には「江戸初期朝鮮特使来訪之図」と記されているが、本稿では当館登録名「朝鮮通信使行列図絵巻」とする。参考のため口絵カラー版として全図【口絵20】を揚げた。

軽妙な淡墨線と明るい色彩で描かれた本資料は巻末に正使、副使、従

事官の役職と年齢、そして「天和二戌年穰九月日」の記載から、徳川綱吉の將軍就任を祝賀して一六八二年(天和二)に来日した通信使を描いたものであることが確かめられる。(以下、翻刻文)

正使 通政大夫

吏曹参議知製教尹趾完 東山居士 四十八九歳と云

副使 通訓大夫弘文館典籍知製教兼

經筵待講官春秋館編修官季彦綱鷺湖 三十九歳

従事 官通訓大夫弘文館 校理知製教

兼經筵侍讀官 春秋館記註官

朴慶俊竹菴 可四十歳 級第四度

天和二戌年穰九月日

小野雀単軒

等林筆(印)

天和度に派遣された朝鮮通信使は、巻末にも書かれているように正使・尹趾完(一六三五〜一七八一)、副使・李彦綱(一六四八〜一七一六)、従事官・朴慶俊(一六四四?)の三使を含む計四七三名が朝鮮から派遣されたが、本図巻に描かれている人物は計一七三名のみで、うち通信使は九十九名が描かれている。本来の数百人からなる通信使の行列より、重要な少数人数のグループを選び出し、新たに構成している。

通信使の行列の先頭には必ず「清道旗」の旗を持つ旗手が立ち、それに続いて楽隊、そして昇・降籠の図柄が描かれた「形名旗」を立てる旗手が描かれる。続いて朝鮮国王の国書が入った華やかな輿を担ぐグループと三使それぞれの轎を取り囲むグループ、そして中下宮や碩学、画員など随員の順で行進するのが一般的である。しかし本図巻には道を清め

払うことを象徴する「清道旗」を持つ旗手は描かれず「形名旗」もみられない。巻頭の部分が切断されていることが確認できることから、巻頭にこれらが描かれていた可能性も考えられ、本図巻は人数をかなり省略化してはいるものの、先頭から最後まで行列の様子を描いた行列図であるといえる。また虎の皮が乗せられた輿が三つもあることから、江戸入りした通信使の登城する前の様子を描いたものであることがわかる。画面の幅に対して人物をやや大きく描いている本図巻は、服装の模様や顔の表情を個性豊かに描いているが、通信使を描いた他の行列図と同じく体のシルエット、服装、そして馬などにパターン化が認められる。また記録画にみられる通信使一行の職名・氏名・人数などがみられず、記録画よりも観賞用の絵画としての側面を重視して描かれたものであると考えられる。

### 三．天和二年、朝鮮通信使の日本来訪と絵画交流

本題からは少し外れるが、ここでは天和度の朝鮮通信使を介して贈られた屏風について少し触れておくことにしたい。すでに本稿で記したように、一六八二年（天和二）第七回朝鮮通信使の訪日目的は五代將軍徳川綱吉（一六四六—一七〇九）の襲封祝賀であった。

三使を初めとする通信使四七三名は五月二十六日釜山に到着し、その後、三船に分乗し対馬に渡り、七月八日同地を発した。以後、壱岐、下関を経て七月二十六日大坂着。八月二日淀川をさかのぼり淀浦から陸路に変え京都に着。八月二十一日江戸に到着し、客館本誓寺に入った。同月二十七日には登城して国書と書契、そして別幅を奉呈した。

天和度に朝鮮王朝が日本幕府に贈った品目は人參、虎皮、繻子などで、これに対する返礼として綱吉は蒔絵や金地画屏風二十双などを贈っていることが確認できる<sup>7)</sup>。

（以下、金屏風二十双の画題。『通航一覽』及び『増訂古画備考』を参照）

- 一、八枚折一双 橋合戦
- 一、六枚折一双 堀川夜討 狩野永真安信
- 一、六枚折一双 江島之景
- 一、六枚折一双 金沢之景 狩野永真安信
- 一、六枚折一双 一谷鴨鳥越
- 兼平最期 狩野探信守政
- 一、六枚折一双 宮島
- 住吉 狩野探信守政
- 一、六枚折一双 梶原二度之驅
- 繼信最期 狩野探雪守定
- 一、二枚折一双 俊成井出之玉川
- 定家佐野之渡 狩野探雪守定
- 一、八枚折一双 七騎落
- 橋弁慶 狩野養卜常信
- 一、六枚折一双 初瀬之景
- 切渡之景 狩野養卜常信
- 一、六枚折一双 河原兄弟
- 木曾願書 狩野洞雲益信
- 一、六枚折一双 うつ保物語 狩野洞雲益信
- 一、六枚折一双 桜馬
- 紅葉馬 狩野春雪信之
- 一、六枚折一双 水鳥 狩野求馬春笑亮信
- 一、 源氏桐つば
- うつせみ 狩野左衛門休白昌信
- 一、六枚折一双 竹に小鳥

松に小鳥 狩野休碓友信

一、六枚折一双 和国耕作 狩野休田清信

一、六枚折一双 鳴渡 狩野内記休山是信

一、□□□□ 桜紅葉小鳥 狩野伯円方信

一、六枚折一双 白梅小鳥

一、六枚折一双 紅梅小鳥 狩野左門安仙春信

一、六枚折一双 源氏之内花

一、六枚折一双 宴紅葉之賀 狩野内匠 柳雪秀信

一、六枚折一双 平等院宇治之景

茶摘 嵯峨之景 狩野主水文信

以上の記録から名所絵四双、武者絵五双、物語絵四双、花鳥画六双、風俗画一双が贈られていたことが確認できるが、画題としてわかりやすい花鳥画が最も多く贈られていたことは特徴として言えるだろう。しかし日本の武者たちの武勇を称えた「武者絵」も五双含まれているなど、いかにも日本的なものが贈られていたことがわかる。朝鮮という異国への贈り物としては当然といえる配慮であったと考えられるが、花鳥画以外の画題の意味を果たして受け側の朝鮮はどの程度理解していたのだろうか。己酉約条（一六〇九年）の締結の際に贈られた「金屏風五對」のうち「楊貴妃図」は相当な議論の対象となっていたようである<sup>(8)</sup>。

また金屏風に対して士大夫は儒教的な儉約主義などの観点から、豪華で装飾的な性向を贅沢と浪費および外形的な技巧物であると批判したが、北学派や脱性理学的な文明意識の視覚から物質的繁栄と優秀な技術として認識した。

金屏風はすでに十五世紀にも伝来しており<sup>(9)</sup>、従来の研究ではその始まりは一四四三年（嘉吉三）とされてきた<sup>(10)</sup>。しかし『実録』によると一四〇八年（応永十五）にはすでに贈られていたことが確認できる。

〔太宗実録〕十六卷 太宗八年七月六日

○壬子／日本大内殿、遣使獻禮物、

有屋轎子一、屏風六、藥材器皿綾絹等物。

その記録には対馬の宗氏と並んで重要視されていた大内氏が使者を通じて礼物を贈ったとされている。日本国王使に次ぐ巨酋使による「屏風六」は、その主題、そして様式などは確認できないが、今後新たな記録が見つかる可能性もあり、注目すべき事実であろう。

金屏風が通信使を通じて朝鮮国王に贈られるのは第四回目の使節団の際である。一六三六年（寛永十三）十二月二十八日に江戸の館舎から幕府の大老と老中が持参した朝鮮国王に贈る大君の回契に付加された回礼別幅に「金屏風二十双」がはじめて記録され、大君が三使に私礼物として金屏風を贈呈した制度がなくなっていたことがわかる。

すでに『通航一覽』や『実録』によって明らかにされている進呈品の目録と韓国側の史料『海行総載』の「回礼別幅」と『通信使贈録』により、第四回（一六三六年）から十二回目（一八一一年）までに贈られた屏風の種類と数量をみると、一八一一年（文化八）の使節団の十双を除く計八回の使節団を通じ、朝鮮国王に毎回二十双の屏風が贈呈された。しかし一七一一年（宝永八）のみ十四双とその数に差があることが確認できる。これは帰国時、釜山で船の沈没がありそれにより失われたと思われる。従って朝鮮国王に贈呈された計一七〇双の屏風のうち、事故で失われた六双を除いた一六四双が国王に贈呈されたであろう。

このように十七世紀以後に贈呈された屏風には十八世紀になると水墨画も見られるが、その多くは日本の代表的な特産品である金屏風であり、十五世紀の朝鮮初期に伝えられた「塗金」、「金粧」、「帖金」、「装金」屏風に比べ「貼金」、「撒金」屏風が多くを占めている。

現在、贈られた屏風のうち残された作品は「田雁秋景図屏風」と「牡丹流水図屏風」のみであるが、一七二一年（宝永八）に贈られた狩野常信の「大井川行幸図」と一七二九年（享保四）に贈られた狩野古信の「四季童遊図」の縮図模本と一八一一年（文化八）に贈られた住吉広行の「堂上放鷹図」の下絵も伝えられていることから朝鮮へ贈られた金屏風の全貌が少しずつ明らかになるであろう。

### 終わりに

「朝鮮通信使行列図絵巻」は従来、ほとんど取り上げられたこなかったといっても過言ではない。多くは朝鮮通信使に焦点をあてた展覧会図録の簡単な解説に止まる程度であり、詳しく解説されてこなかった。

しかし「朝鮮通信使行列図絵巻」は、数少ない天和度の朝鮮通信使の行列を描いた図巻として、記録画としての分析よりも江戸時代の絵師による絵画作品として解釈する必要もあり、これによって朝鮮通信使の行列図が江戸時代にどのような受容され、描かれてきたかが少しずつ明らかになるのではないかと思う。以上のことから今後、資料のさらなる分析と展示などを通じた公開を進め、研究の一助となるよう努めていきたい。

- (1) 辛基秀・仲尾宏責『大系朝鮮通信使大系善隣と友好の記録・朝鮮通信使』第一巻（第八巻、明石書店、一九九三～九六年）。
- 尹芝恵『日本絵画の中の朝鮮通信使』『リポート二十二』二十一世紀・地球講座から、島根県立大学、二〇〇五、年。
- 郷司泰仁『朝鮮通信使随行画員—日本人との関わり』『アジア遊学』一二〇号、勉誠出版、二〇〇九年一四二～一五三頁。
- 尹芝恵「異国を見る眼—朝鮮通信使にまつわる絵画を通じた日韓比較文化研究—」『鹿島美術研究』二十四号、鹿島美術財団、二〇〇六年。
- (2) 本稿で取り上げる朝鮮通信使については次の論考を参照した。
- 中村栄孝『日鮮関係史の研究』下、吉川弘文館、一九六九年。
- 辛基秀ほか著『朝鮮通信使絵図修正』講談社、一九八五年。
- 李進熙『江戸時代の朝鮮通信使』講談社、一九八七年。
- 三宅英利『近世日朝関係史の研究』文献出版、一九八七年。
- 辛基秀『朝鮮通信使往来—労働経済社、一九九三年。
- 上田正昭編『朝鮮通信使—善隣と友好のみより—』明石書店、一九九五年。
- 仲尾宏著『朝鮮通信使と徳川幕府』明石書店、一九九七年。
- 田中健夫『東アジア通交圏と国際認識』吉川弘文館、一九九七年。
- 李元植『朝鮮通信使の研究』思文閣出版、一九九七年。
- 辛基秀『朝鮮通信使—人の往来、文化の交流—』明石書店、一九九九年。
- 辛基秀・仲尾宏著編著『図説朝鮮通信使の旅』明石書店、二〇〇〇年。
- 西村穂子『日本見聞録に見る朝鮮通信使』明石書店、二〇〇〇年。
- (3) 辛基秀『朝鮮通信使とその時代』明石書店、二〇〇一年、百十八頁。
- (4) 仲尾宏『朝鮮通信使—江戸日本の誠信外交—』岩波新書、二〇〇八年。
- (5) 朝鮮との貿易仕法は三種類に分けられる。
- (1) 封進（当初は進上）朝鮮国王への封進物として胡椒・蘇木・明礬・銅盤・銅鏡・金屏風などを贈り、これに対する回賜として朝鮮人参・虎皮・豹皮・白木綿・黒麻布・筆墨・鷹などが渡された。贈答の形式をとってはいるが、実質においては貿易に等しかった。
- (2) 公貿易 対馬から、銅・錫・蘇木・水牛角・胡椒・明礬などが輸出され、朝鮮政府が公木（木綿）を出して交易をした。ただし、慶安四年（一六五一）に公木の一部が米に替えられ、万治三年（一六六〇）以降は年々白米一万六千俵となった。

- ③ 私貿易釜山の倭館内で毎月三と八の日の六日間に市を開き、対馬藩から派遣されている代官が朝鮮商人と交渉して取引をした。商人数は十七世紀後半には一定数に限られ、朝鮮側の役人立ち会いのもとの交易であった。
- 『日本文化の歴史・江戸』進士慶幹編集、小学館、一九八八年、九十六頁。
- (6) 今橋映子「「こころの交流 朝鮮通信使―江戸時代から二十一世紀へのメッセージ」展」『展覧会カタログの愉しみ』東京大学出版会、二〇〇三年、百十三～百十八頁。
- (7) 榊原悟『美の架け橋 異国に遣わされた屏風たち』ぺりかん社、二〇〇二年、一六二～一七六頁。
- (8) 「朝鮮国王に贈呈された「楊貴妃図屏風」―己酉約条と「金屏風五對」をめぐって」『美術史』美術史学会一七二号、二〇一二年三月。
- (9) 赤沢英二「十五世紀における金屏風について」『國華』八四九号、国華社、一九六二年、五六七～五七九頁。
- (10) 前掲、榊原悟『美の架け橋 異国に遣わされた屏風たち』。